

日本・オーストラリア高等教育質保証セミナー
「高等教育の国際化・学習成果の向上にむけたイニシアティブ」

国際基督教大学 学長 鈴木典比古

日本の大学は長い間専門学部制度をとり、入学当初から専門分野を学び、一般教育に関しては十分な配慮がなされてこなかった。しかし、2008年暮れに中央教育審議会大学分科会『我が国学士課程教育の構築に向けて』が公表されるにおよび、大学教育は学士課程4年間で学習成果として身につける学士力を保証する学士課程教育に転換することになった。

学士力とは、①知識・理解力、②汎用的技能、③態度・志向、④総合的経験と創造的思考、等の諸能力を総合した、言わば全人力とされる。他方、大学教員はこの様な学士力涵養に対応するための教育力を有していなければならない。一般に学士力と教育力との関係は、 $\text{学士力} = f(\text{教育力})$ という関数関係であらわされるであろう。つまり、学生の学士力を決めるのは教員の教育力であるということである。特に学士力が上記の①、②など、知識の量や技術の獲得の範囲にある場合にはこの関数関係は妥当する。しかし、学士力が③や④の範疇に入ってくると、この関数関係は常に明確であるとは限らない。すなわち学士力が③、④等、態度や志向、さらに総合的経験や創造的思考を内包するものとなると、学生自身の潜在能力や生活体験や個人的経験が重要になってくる。そのような場合、学士力と教育力との関係は同等であったり、極端な場合、学士力と教育力が逆転するようなケースも在り得るであろう。すなわち、 $\text{教育力} = f(\text{学士力})$ 。(例；学生の実習体験プレゼンテーションを教員が聞くような場合)。

さて、それでは教育成果として全人的な学士力を身に付けさせるための効果的なクラス・マネジメントとは如何に考えられるであろうか。それは、授業の中で、上記の $\text{学士力} = f(\text{教育力})$ 、 $\text{学士力} = \text{教育力}$ 、 $\text{教育力} = f(\text{学士力})$ という、学士力と教育力との関係の三態が交互に、ダイナミックに展開される状況を作り出すことにある。この様なクラス・マネジメントを可能にするためには以下のように2種類の小道具のセットが必要であり、これらの小道具の連携・統合的な運用が不可欠である。

大学側のベンチマーク用小道具

1. 学習成果の到達点と学位の水準を明示するために、「科目番号制」によって科目を配置し、カリキュラムの構造化を図る。
2. 授業は一方向的な講義ではなく、教員と学生、あるいは学生間の「対話」を基本とする。
3. 有効な対話を可能にするために、予習が出来る「シラバス」を作成する。
4. 中間・最終試験、小テスト、レポート等の種々の方法により学生の学習経過、学習到達点を計測し、「成績管理」をする。

5. 学習成果を経年的に記録するために「GPA」制度を活用する。

学生側のベンチマーク用小道具

6. 教員の授業改善に資するように、学生による「授業評価」を行う。
7. 学生自身の学習計画と成長の記録として「経年的学修 Portfolio」を課す。
8. 学生自身が修学を通じてどのくらい成長し、また受けた教育に満足（不満足）を感じているかを自己評価する「学生満足度 Student Satisfaction Survey」を課す。(ICU では ICU 学生学習意識調査「ICU Student Engagement Survey」－3年生対象－)
9. 卒業生が、大学で受けた教育に対してどのような評価をしているかを調査する「卒業生満足度 Alumni Satisfaction Survey」を経年的に実施する。(ICU では4年生卒業調査「Senior Exit Survey」－4年生対象－)

上記のような小道具セットの有効な運用によって科目の豊かな質の保証、ひいては教育の「標準化」が可能になる。そして、大切なことは、どのような科目を開発し、カリキュラムに配置するかは、各大学の建学の精神と教育目標に基づく主体性と責任に任されており、このことによってカリキュラムの独自性と各大学の「多様性」が深化し保証されるのである。大学は積極的に「多様性」を追求し、以って他大学との差異化を図らなければならない。かくして、教育の「標準化」と「多様化」が構造的に同時併存することが可能になるのである。

さて、上記の1～5は、教育サービスを提供する大学が、建学の理念や教育目的に照らして学生をどのような人間に教育していこうとしているのかを表明する、学習成果に関する「大学側のベンチマーク」を達成するための小道具である。この小道具の中でも「科目番号化」は重要であるが、日本の大学の多くはこの「科目番号化」を導入していない。それに対して、6～9は、そのような大学の理念・目的に基づいて提供されている教育サービスを享けた学生が、自分はどのくらい成長したか、また大学が提供した教育サービスにどのくらい満足したか、を表明する「学生側のベンチマーク」用小道具である。このように、1～5の小道具を「大学側のベンチマーク小道具」、6～9を「学生側のベンチマーク小道具」と呼ぶならば、この二つのベンチマーク小道具の統合的運用によって「学位にふさわしい教育の質保証 Due Quality Assurance for Due Diploma」が初めて可能になるのである。

大学教育の国際化とは、上記のような小道具類によって質の保証をした科目群を留学生が履修し、その成績を自分の大学に transfer し、卒業要件の一部にすることが出来るシステムを日本の大学と海外の大学との間で構築することである。